九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

蕉園詩社と杭州顧氏

李，恬
九州大学大学院 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/27314

出版情報：中国文学論集. 41, pp.74-84, 2012-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

蕉園詩社と杭州顧氏

李　恬

一　はじめに

明清時代の中国では、江南地方を中心として、数多くの女流詩人を輩出した。明末には、呉江の名族であった葉氏、沈氏両族の女流詩人、桐城の方氏姉妹をはじめ、女流詩人の詩歌唱和が流行したが、乾隆年間になると、袁枚が多くの女弟子を集めるなど、女流詩人は文学集団として徐々に人々に認識されるようになった。高彦頤氏はそれらの女流詩人をその交遊範囲によって、三つのグループに分けている。即ち、親戚と唱和する「家居式」、親友と唱和する「交際式」、及び男性文人の間や社会でも声望を得た「公衆式」である。[1] その三種の中でも、女流詩人が自分自身の団体に名前を付け、正式な詩社として文学活動を行った例について考える場合、清朝初期における杭州の蕉園詩社の存在を無視することはできない。

康熙年間に活動した蕉園詩社は、正式な女流詩社として、当時のみならず、後世の女流詩社にも影響を及ぼした。メンバーは柴静儀、馮嫺、銭鳳綸、顧姒、林以寧等とされ、彼女らの著作は、筆者が調査した限りでは、銭鳳綸の『古香楼集』一冊四巻、林以寧の『墨荘詩鈔』二冊二巻、『墨荘文鈔』一冊一巻、『墨荘詞余』一冊一巻が北京の国家図書館に所蔵される以外には、柴静儀、馮嫺、顧姒の著作は全く残っていない。各選集を紐解けば、僅か十数首の詩歌が残存しているのみであるが、その中からも彼女らが風雅な文学活動を繰り広げた面影を見ることができる。

これまで、蕉園詩社と蕉園諸子に関する研究は不足しており、呉晶氏は「蕉園詩社（派）与蕉園諸子」において、

先行研究を詳しく調査したところ、専門の研究はほとんどないと指摘している。[2] 李月嫵氏の「蕉園詩社与清初女性文学伝統[3]」には、蕉園詩社の存続時間や蕉園諸子の生卒年について考証がなされているが、未だ研究の余地を多く残している。本論文ではこれらの論文を踏まえて、蕉園詩社に所属した女流詩人が如何に「家居式」の女流詩社から地域の制限を突破し、自らの女流文学を発展させていったかについて考察したい。

二　詩社の結成と顧長任の「志」

蕉園諸子が知り合ったきっかけについて、林以寧は次のように述べている。

歳甲寅、嫂得疾以卒。兄寅三思成其志、始命余爲小啓、請海内同人爲哀挽、以弔焉。遂以余名達於閨媛大家。……因備考其世譜、蓋余夫子同宗嬸也。……遂因詩啓得見於夫人。夫人忘其卑幼、而引與交、月必數會、會必拈韻分題、吟詠至夕。且又各推其姻婭、若柴季嫺、李端明、錢雲儀、顧啓姬、人定金蘭、家饒雪絮、聯吟卷帙、日益月增。

歳は甲寅（康熙十三年、一六七四）、嫂（顧長任）は疾を得て以て卒す。兄の寅三は其の志を成さしめんことを思ひ、始めて余に小啓を爲すことを命じ、海内の同人に請ひて哀挽を爲し、以て焉を弔はんとす。遂に、余が名を以って閨媛大家に達す。……因りて其の世譜を備に考ふるに、蓋し余の夫子の同宗の嬸なり。……遂に詩啓に因りて夫人（馮嫺）を見ることを得たり。夫人は其の卑幼を忘れ、引きて與に交はり、月に必ず數會し、會には必ず韻を拈り題を分かち、吟詠して夕に至る。且つ又各の其の姻婭を推し、柴季嫺（柴静儀）、李端明（李淑昭）、錢雲儀（錢鳳綸）、顧啓姬（顧姒）の若き、人は金蘭を定め、家に雪絮を饒し、卷帙に聯吟し、日に益し月に增す。

（林以寧「和鳴集跋」、『清代名媛文苑[4]』）

林以寧の兄嫁とは、林以寧のいとこ、顧姒の姉である顧長任（字は重楣）である。康熙元年（一六六二）、林以寧八歳の時、林以寧の兄林以畏と結婚した。以後、「老母命為師友[5]（老母は命じて師友と為す）」のために、顧長任は、林以寧の家庭教師の役割を演じたのである。しかし、十二年後の康熙十三年（一六七四）、顧長任は病卒した。引用

文のように、林以寧は顧長任の生前の「志」を受け継ぎ、閨秀たちの挽歌を求めたため、馮嫺の注目を引いた。その後、二人は互いに各自の親戚を紹介した。即ち、馮嫺は林以寧に柴静儀、李淑昭を、林以寧は馮嫺に銭鳳綸、顧姒を引き合わせたのである。以降、彼女らはたびたび唱和を行っている。この「志」について、林以寧は次のように述べる。

余少也讀書、苦無所資、獨與伯嫂顧重楣稱筆硯友、不知海内名媛詩學稱最者幾人、人幾集、集幾卷。而其人之遠近、里閈之比鄰、更不遑計也。每與嫂氏言及、嫂思遍識時媛、……

余は少くして讀書し、資すること無きに苦しみ、獨り伯嫂の顧重楣（顧長任）と筆硯の友と稱す、知らず海内の名媛、詩學最と稱する者の幾人、人幾集、集幾卷あるかを。而して其の人の遠近、里閈の比鄰、更に計るに遑なし。每に嫂氏と言及し、嫂は遍く時の媛を識ることを思ひ……

（林以寧「和鳴集跋」、『清代名媛文苑』[6]）

ここから、顧長任の「志」というのは天下の名媛と交友をもつことであるということが分かる。顧長任はこの「志」を達成させ、蕉園諸子は互いに知るところとなった。たとえ顧長任が詩社の活動に参加しなかったとしても、蕉園諸子が彼女のおかげで集まったことは間違いない。

三　顧豹文の願圃について

蕉園諸子は一体どこで文学活動を行ったか。現存する蕉園諸子の集会の詩歌を見ると、「蕉園」より、「願圃」という場所がよく登場する。たとえば、林以寧には詩題に「秋暮讌集願圃、同季嫺、又令、雲儀、啓姫分韻[7]（秋暮願圃に讌集す、季嫺［柴静儀］、又令［馮嫺］、雲儀［銭鳳綸］、啓姫［顧姒］と同に韻を分つ）」、「重遊願圃有懐又令、季嫺、雲儀諸子[7]（重ねて願圃を遊び、又令［馮嫺］、季嫺［柴静儀］、雲儀［銭鳳綸］諸子を懐ふ有り）」とあり、また、馮嫺に「重九後二日、林亜清、顧啓姫、銭雲儀偕遊願圃、即景限韻[8]（重九後二日、林亜清［林以寧］、顧啓姫［顧姒］、銭雲儀［銭鳳綸］願圃を偕遊す、景に即し韻を限る）」、柴静儀に「過願圃同馮又令、銭雲儀、顧啓姫、林

亜清作[9]（願圃に過り馮又令［馮嫺］、銭雲儀［銭鳳綸］、顧啓姫［顧姒］、林亜清［林以寧］と同に作す）」、銭鳳綸に「偕諸夫人重過願圃[10]（諸夫人と願圃に重ねて過す）」とある。

願圃の持ち主である顧豹文は、順治十二年（一六五五）の進士で、真陽県令、江西道御史を歴任した。退官した後は、杭州に戻って、兄の顧鳳文と共に資金を寄付し、竹竿巷の白沢廟を修築した[11]。『国朝杭郡詩輯』では顧豹文について以下のように述べられている。

舊第在竹竿巷、又得近巷廢園、建小樓、與二三老友商略經史、名曰願圃。……性好客、一日無客則不樂。曰ふ。……性は客を好み、一日客無ければ則ち樂しまず。（『国朝杭郡詩輯』巻一[12]）

竹竿巷は今杭州市下城区にあり、西湖の銭塘門からわずか一キロメートルの距離にすぎない**【後掲図参照】**。その近くにある願圃の面影も現在は近代化のために住宅団地に姿を変えている。願圃の風雅はただ歴史書の中のみに確認できる。例えば、『武林坊巷志』によれば、願圃に招待された「客」として、毛先舒、毛際可、呉農祥、邵錫栄、丁文策を含めて、多くの杭州名士が挙げられている[13]。顧豹文と銭鳳綸の母親、林以寧の姑である顧之瓊の間に具体的にどのような関係があったかを考証することは困難である。しかし、顧豹文の息子たちと兄弟の息子たちの名は顧之珽、顧之璵、顧之浚、顧之珩といい、顧之瓊と顧豹文は非常に近い血縁関係である可能性が高い**【後掲系図参照】**。杭州で名を馳せるに至った蕉園諸子は、顧之瓊を介して、願圃に招待された可能性も考えられる。特に銭鳳綸は柴静儀に対して「丙辰秋季、始於願圃、望見丰采[14]（丙辰［康熙十五年、一六七六］秋季、始めて願圃に於いて、丰采を望見す）」と述べ、二人が初めて知り合った場所はこの願圃であると述べている。

そして、銭鳳綸には「懐馮夫人又令（馮嫺）」二首（銭鳳綸『古香楼詩』）があり、其一は次のように詠う。

願圃芙蓉候　願圃に芙蓉を候ふ、
同人昔共過　同人　昔　共に過ぎる。
秋雲飛遠浦　秋雲　遠浦に飛び、
涼月掛纖蘿　涼月　纖蘿に掛かる。

泉韻清琴調　　泉韻　琴の調べを清くし、
萍風入棹歌　　萍風　棹歌に入る。
歸來問新句　　歸來　新句を問ふ、
今日阿誰多　　今日　阿誰(だれ)か多き。

このように、銭鳳綸は馮嫺を含めて詩社のメンバーとともに集会した場面を回想している。蕉園諸子が願圃の芙蓉を観賞するために、願圃に集まり、日がな一日、願圃の風景を楽しむ。琴を弾き、小舟を漕ぎ、歌を唱うことなども蕉園諸子の集会の内容である。しかし、その中で最も重要なのは、詩を書くことである。作った詩が多ければ多いほど評価が高く、愉快な雰囲気の裏側に、競争的な緊張感を持っている。このような集会は個人庭園を提供した顧豹文の支持なしには考えられない。

四　顧姒と澱浜詩社

しかし、蕉園諸子が風雅な文学の交流を繰り広げた期間はそれほど長くは続かなかった。夫が官職を求めて奔走することによって、女性詩人たちは夫と共に杭州を離れなければならない。蕉園諸子の中で、杭州を離れたのが最も早いのは顧姒である。これについて、銭鳳綸は次のように述べる。

今啓姫已棹舟北上。我輩相去不數歩、復以塵務紛擾、經年契闊、徒深嶺雲梁月之思。

（銭鳳綸「与林亜清」、『古香楼雑著』）

今啓姫已に舟を棹さして北上す。我輩相去ること数歩ならず、復た塵務の紛擾たるを以て、年を經て契闊として、徒らに嶺雲梁月の思ひを深くす。

顧姒が夫に随って北京に行ったのは、康熙十九年（一六八〇）のことで、その後、蕉園の文学活動は一時停止したことがわかる。しかし、顧長任の「志」は蕉園詩社の解散とともに、消えることはなかった。

顧姒が北京に着いたあと、薛媛という女流詩人と知り合っている。顧姒の「燕台春　贈薛媛」[16]中に「縱苧蘿村裡、金穀園中、携来相並、也遜些些（縱ひ苧蘿村の裡、金穀園の中、携へ来りて相並ぶも、也た些些遜るなり）」とある

ように、古代の美女西施、緑珠よりも美しいと賞賛している。しかし、しばらくして薛媛は亡くなっている。そこで、顧姒は薛媛の訃報を、杭州に在って薛媛に会っていない林以寧に知らせて、挽歌を求めている。林以寧はこれに応じて挽歌を書いた。その理由はただ「旅人愛同調[16]（旅人は同調を愛す）」、即ち亡くなった顧長任の「志」は、林以寧、顧姒に受け継がれ、さらに薛媛とも繋がっているのである。

顧姒は北京の旅が終わったあと、また新しい旅行を始めた。『青浦縣志』に、次のように述べている。

顧姒、字啓姬、仁和鄂曾妻、縣丞之繡女。之繡官青浦、姒偕壻以來、嘗與錢塘林以寧、華亭曹鑒氷、結澱濱詩會。……林以寧、字亞清、御史錢肇修妻、著有『墨莊詩鈔』、尋歸故里。鑒氷、曹重之女、嫁七寶張曰瑚、兼工畫、王原稱其有朱淑真、管夫人之風。著『清閨小草』、亦原爲之序。

顧姒、字は啓姬、仁和の鄂曾の妻、縣丞之繡の女なり。之繡は青浦に官し、姒は壻を偕へて以來、嘗て錢塘の林以寧、華亭の曹鑒氷と澱濱詩會を結ぶ。……林以寧は、字は亞清、御史錢肇修の妻、著に『墨莊詩鈔』有り、尋で故里に歸る。鑒氷は、曹重の女、七寶の張曰瑚に嫁ぎ、兼ねて畫に工なり。王原は其の朱淑真、管夫人の風有るを稱せらる。『清閨小草』を著はし、亦た原之の爲に序す。

（陳其元『青浦縣志』巻二十三、光緒刻本、国家図書館所蔵）

この記述から、顧姒が上海に滞在した時、林以寧ともう一人の上海出身の閨秀詩人曹鑒氷と共に澱濱詩會が結成されたことが分かる。しかし、しばらくして、林以寧は杭州に戻ったので、澱濱詩會の活動も停止しなければならなかった。現在、顧姒の詩文集は既に散逸し、林以寧の詩文集において、この澱濱詩會に言及していないため、澱濱詩會の実態は明らかにする手立てがない。しかし、『青浦縣志』巻十三によって、顧姒の父親である顧之繡が縣丞に就任したのは、康熙二十年[17]（一六八一）のことで、故に、澱濱詩會の結成はその年より遅いことが分かる。蕉園詩社は康熙十五年（一六七六）に成立[18]したもので、康熙十九年（一六八〇）に至って、顧姒が夫に随って北京に行ったため、活動が停止した。康熙二十年（一六八一）以後、顧姒と林以寧の旅によって、詩社という文学組織は杭州のみならず、上海でも開かれ、メンバーの出身地も杭州に限らず、上海籍の閨秀詩人も含まれ、顧長任の天下の名媛と交友を結びたいという「志」はいっそう実現されて、蕉園詩社の風雅も引き継がれた。

蕉園詩社と杭州顧氏

五　おわりに

閨秀とは、名家の出身で、学芸に優れた女性のことである。明代以前の中国における閨秀詩人として、漢の班昭、蔡文姫、宋の李清照、朱淑真などが挙げられるが、彼女らは一人一人独立した文学活動を行っていた。繁栄の一方、明代社会の矛盾が深まった万暦期に入ると、王陽明の哲学に潜在していた体制批判の要素を左派的に展開した泰州学派の思想が広がりを見せ始めた。男女才知が平等であるとする考え方は一部の知識人を中心に広まった。男性文人が女性教育の推進を提唱したことによって、明の中期以降、女子教育は急速に進んだ。勿論、その時の教育というのは、読み書きだけでなく、古代の賢女の故事を熟読するという道徳教育も含むものである。林以寧は文集『墨荘文鈔』の自序において、「余少從母氏受書[19]（余は少くして母氏より書を受く）」と述べているように、少女時代に、母親から教育を受けていた。少女時代に母親から文学の基礎を学ぶ例は、蕉園詩社の中堅である柴静儀にも当てはまる。彼女の詩集『北堂詩集』に林以寧の筆による序文があり、その文中に、「授書母氏[20]（書を母氏より授かる）」とある。これによって、家族の中の年長の女性から、道徳教育とともに、詩の作法などを学ぶことが一般的であったことが分かる。

故に、蕉園諸子の周囲で家庭教師の役割を担当した人として、銭鳳綸の祖母である顧若璞は重要な人物である。顧若璞は二十八歳で夫黄汝亨を亡くし、一人で息子を育てた。夫の父から学問を学び、息子の成長にしたがって、息子に家伝の学問を教えた。それだけでなく、自分の家に読書社を作って、息子とその妻とともに学問を教授した。嫁である丁玉如は、普通の女子が行わない国政についての議論も許された。彼女は夫の黄燦とともに国境軍備について議論していたという[21]。このような教養ある母による教育が行き届いた家庭に育った人は、考え方もより柔軟である。そして、大家族の主人として母が息子や孫たちはもちろん、息子の妻や孫の妻たちにも学問の指導を行ったことは、中国の歴史においても例は少ない。康熙十九年（一六八〇）、顧若璞は八十九歳の老齢にも関わらず、銭鳳綸の詩集『古香楼集』を出版する際に序文を書いた[22]。顧若璞は自分の家族の文学伝統を辿って、また後輩の「侄女玉蕊夫人（顧之瓊）」と「孫婦銭鳳綸」の文学的才能を賞賛し、蕉園諸子のために文学創作の雰囲気を作ったと思わ

れる。彼女の教育は、蕉園詩社の詩人たちの活動に繋がり、詩集出版の基礎となったのである。

顧長任の「志」の形成は開放的な家庭と切り離せない関係にある。また、「志」の実体としての蕉園詩社の活動も顧豹文の支持と切り離して論じることはできない。家族の移動につれ、顧姒のように異なる出身地の閨秀詩人も詩社を作り、文学活動をあちこちで繰り拡げたことは、康熙初年の女流文学における一種の新しいあり方を提供したと言える。後世の秋紅吟社や呉中十子にも蕉園諸子の影響が見える。それは顧氏一族の努力なしには考えられない。

注

（1）基於成員資格和活動、我將婦女詩社分爲三類、家居式、社交式和公衆式。「家居式」社團是最不正規的、它出現于飯後母親或婆婆與其他女性親屬聚集在一起談論文學或當她們於花園散歩吟作詩歌之時。因所有婦女都是由親屬關係紐帶連結在一起的、並且她們的文學活動也是在日常生活中進行、所以這種結社是「家庭式」的。「社交式」社團中由一些有親戚關係的女性和鄰居、或是遠方的朋友所組成、儘管「社交式」社團較「家居式」社團所撒之網更廣、但她們的活動也是非正規而不張揚的。它可以被視作是其他兩種社團的過渡形態。第三種結社之所以被稱作「公衆式」社團、是因爲它的出版物及其成員的文學聲望所帶來的公衆認知度。有個別的女詩社有正式的名字、如蕉園七子、吳中十子等。作爲親屬、鄰居、同門或是氣味相投的作家、一群才女聚在一起、談論詩詞、結集出版、和男性詩社一逞高下。（大意：メンバーの資格と活動によって、私は女流詩社を三つのグループに分けている。即ち「家居式」、「交際式」と「公衆式」である。「家居式」は最も不正規で、家族内の女性は家事の余暇に文学活動を行う形式である。「交際式」は親戚と友達を結成させ、「家居式」と「公衆式」の過渡形態である。「公衆式」は男性文人の間や社会でも声望を得たものである。）高彦頤『閨塾師：明末清初的才女文化』江蘇人民出版社、二〇〇五年。

（2）呉晶「蕉園詩社（派）与蕉園諸子」（『杭州研究』第三期、二〇〇八年）一七五、一七六頁参照。

（3）李月嬿「蕉園詩社與清初女性文学伝統」（『清代文学研究集刊』第三輯、二〇一〇年）。

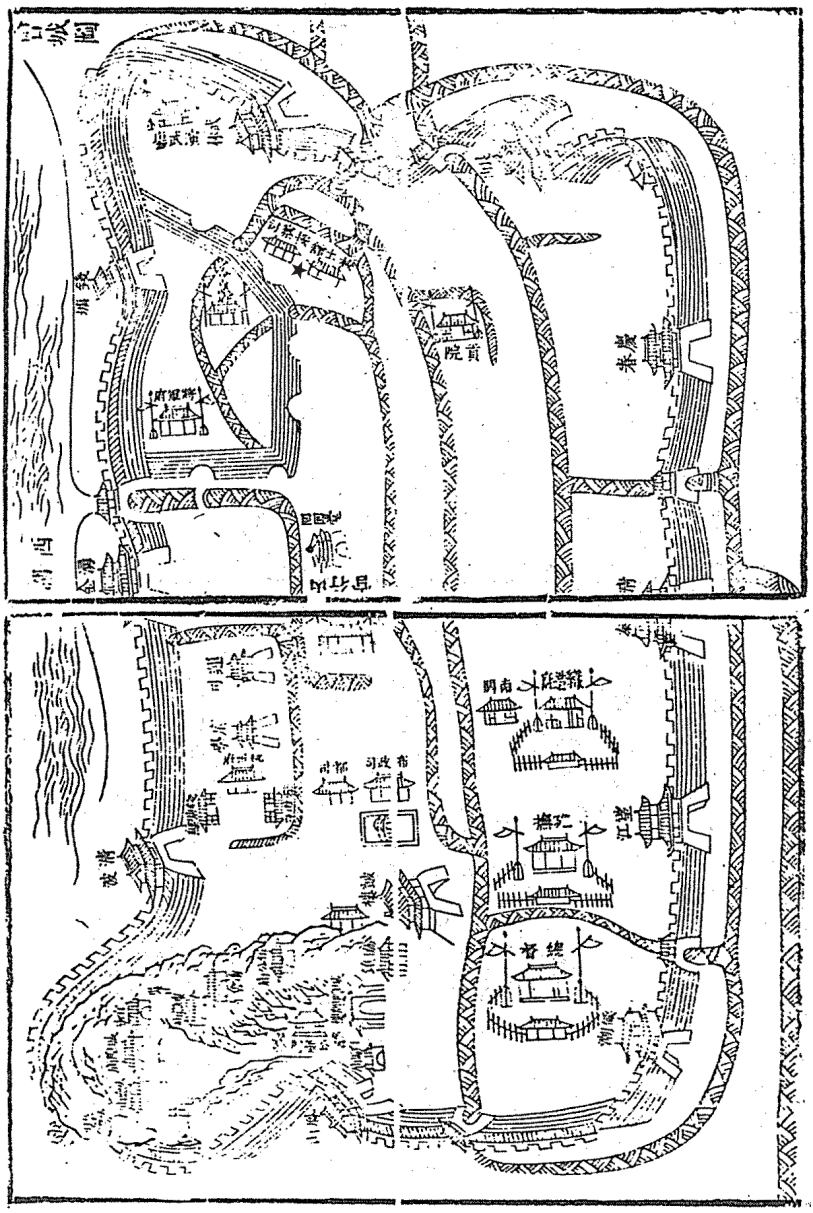
（4）林以寧「和鳴集跋」（『清代名媛文苑』、世界書局、一九六一年）。

(5) 林以寧「贈言自序」(『墨荘文鈔』巻一)。
(6) 林以寧「和鳴集跋」(『清代名媛文苑』、世界書局、一九六一年)。
(7) 林以寧『墨荘詩鈔』巻一。
(8) 丁丙『武林坊巷志』第七冊「顧家園」(浙江人民出版社、一九九〇年)。
(9) 蔡殿斉『国朝閨閣詩鈔』第一冊巻八(『続修四庫全書』清道光嫏嬛別館刻本影印)。
(10) 銭鳳綸『古香楼詩』。
(11) 丁丙『武林坊巷志』第七冊「竹竿巷」(浙江人民出版社、一九九〇年)。
(12) 呉顥原本、呉振棫重編『国朝杭郡詩輯』(江蘇廣陵古籍刻印社、一九八八年)。
(13) 丁丙『武林坊巷志』第七冊「顧家園」、浙江人民出版社、一九九〇年。
(14) 銭鳳綸『古香楼雑著』。
(15) 徐樹敏、銭岳『衆香詞』樂集、康熙錦樹堂刻本、国家図書館所蔵。
(16) 林以寧『墨荘詩鈔』巻一。
(17) 陳其元『青浦縣志』巻十三、光緒刻本。
(18) 「蕉園之訂、昉自丙辰(康熙十五年、一六七六)。」(林以寧「哭柴季嫺四首」(『墨荘詩鈔』巻二)の馮嫺識に拠る)。
(19) 林以寧『墨荘文鈔』。
(20) 林以寧『墨荘文鈔』。
(21) 顧若璞「与張夫人」(陳韶『歴代名媛尺牘』、清同治刻本影印、東京国立国会図書館所蔵)。
(22) 顧若璞「序」(銭鳳綸『古香楼集』)。

顧氏家系略圖

- 顧恒宇
  - 顧君明
    - 顧龍文（仲御）
      - 顧之珩
  - 顧大觀
    - 顧豹文（季蔚）
      - 顧之璵
      - 顧之珽（搢玉）
      - 顧之浚
      - 顧之繡（簫雲）
        - **顧 姒（啟姬）**
        - = **顧長任（重楣）**
- 林 綸
  - 林以畏（寅三）
    - = **林以寧（亞清）**
    - 錢肇修（石臣）
      - = **錢鳳綸（雲儀）**
- 錢開宗（繩庵）
  - = **顧之瓊（玉蕊）**
- 黃汝亨
  - 黃茂梧（東昇）
    - = **顧若璞（和知）**
      - 黃 燦（維蘊）
        - 黃弘修（式序）
- 顧友白
  - **顧若璞（和知）**
  - 顧若群（不黨）

＊『武林坊巷志』、『杭州府志』、『國朝杭郡詩輯』等に拠る。
反転文字の三名が蕉園諸子。



杭州城図（『（康熙）銭塘県志』より）

竹竿巷は今の杭州市下城区にあり、顧豹文の願圃（★の地点）は今日の馬寅初記念館（慶春路210号）のあたりにあった。